大手外食企業の加工場を併設

五十嵐冷蔵㈱日高ＬＳＳ竣工

超低温から常温までの多温度帯

昨年で創業85周年を迎えた五十嵐冷蔵㈱（東京都港区芝浦、五十嵐康之社長）では、記念事業の一環として埼玉県日高市に昨年6月より建設を進めていた日高LSS（ロジスティクスサービスステーション）約1万5千㌧がこの程竣工、7月22日LSS内で地元の大沢日高市長も参列して竣工式が挙行された。

圏央道狭山日高インターより約3㎞、高速道路沿いに建つ新LSSは高速道路から同社のトレードマーク（青と白色の縦縞模様）がよく見える。中央道八王子に直結して以来、圏央道の通行車両は飛躍的に増大。周辺には多くの物流施設が点在している。

㈱松田平田設計の設計管理、㈱清水建設㈱の建築工事、㈱前川製作所の冷却設備工事よって完成した同LSSは鉄筋コンクリート造4階建、大手外食チェーン企業の食品加工棟を併設している。敷地面積14、258㎡（約4319坪）、建築面積5990㎡（うち冷蔵倉庫4194㎡）、延床面積18、451㎡。冷蔵収容能力はF級1万2178㌧、C級2170㌧、SF（超低温）306㌧、定温庫597㌧、計1万5251㌧に常温庫682㎡を備えた多目的多温度帯倉庫。首都圏港湾地区中心に冷蔵物流事業を展開する同社にとって10番目の拠点となるが、超低温からドライ倉庫まで完備したLSSは同社でも始めて。業界でも稀なケースである。設備投資額は約30億円（土地代込み）。その特徴は概要次のとおりである。

1階は全面荷捌場

倉庫管理システム採用

①1階は一次保管など仮置施設があるだけで大半が広大な低温荷捌場（5度C、約2000㎡）、アンポンドスラブ工法の採用により荷捌場の柱間は9・9mのロングスパン、広く使いやすい。全長およそ100mのプラットフォームにドックシェルター計18基（うちレベラー1基）。入庫、出庫エリア区分され、2ヶ所の外部出入口が設置されている。

②荷役機器ではエレベーター1基、垂直搬送機4基を設置。4階には移動ラック（1152棚）及びWMS（倉庫管理システム）を採用。ハンディターミナルを使用したペーパーレス作業を実現。パレット単位のバーコード入力を通じて移動ラック初め平置タイプの庫内も3次元方向からの位置確認により正確なロケーション管理を可能にしている他、移動ラックへの入庫は、出庫作業を効率化した自動棚割付を採用。

前川製作所の新型冷凍機「ニュートン3000」採用

③冷却設備では環境負荷の低減から自然冷媒のアンモニア（荷捌場はフロン）を採用、前川製作所の新型冷凍機「ニュートン3000」を4基導入。業界では日水物流川崎、ホウスイ船橋に次いで3例目だが、従来の冷凍機より20%の省エネを実現（同社比）、CO_2を間接冷媒（二次冷媒）に組み合わせたシステムで安全性も高い。

④庫内照明は200ルクス以上、荷捌場各階は350ルクスと業界でも高いレベルの明るさを確保している。これは業務用冷凍食品など多種多様な輸入商材を多く扱う同社にとって作業環境の改善策の一環で、全事業所で照明機器のレベルアップを図っている。

蓄光式避難誘導板を設置

⑤庫内の誘導灯も一般的な緑色灯ではなく、「アベイラス高輝度蓄光式避難誘導板」（三池工業㈱販売）を採用。これは蓄光タイプの表示板で庫内の壁面に設置するだけという優れもの。今回は庫内全体で98ヶ所。設置工事もバッテリーも不要、電気を使用しないためCO_2削減にも繋がっている。消防法の手続きが必要になるが、地元消防署から承認を得ている。

今回の新設LSSは平成9年の東扇島LSS（約3万2800㌧・川崎市）以来ほぼ10年ぶり。大手外食チェーンの食材倉庫としての役割を一部担う。

更なる飛躍を誓う

五十嵐康之社長は「日高LSSは当社として初の本格的な内陸型ロジスティクスサービスステーションであり、環境にやさしい、省エネにも配慮した冷蔵倉庫として完成した。今回の稼働により首都圏に10事業所、およそ23万㌧強の規模となった。安全・安心を基本にこれからも食の安定供給に努めると共に、これを機に新たな物流展開を通じて更なる飛躍を目指したい」と抱負を語る。

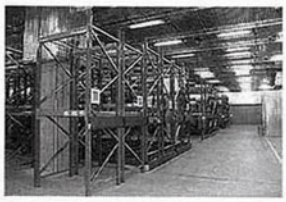
石川栄二所長（54）は東京都出身。営業経験が長く上尾、東扇島LSS各所長を経て日高の責任者に抜擢されている。365日運営を展開する。

同社の沿革

大正11年創業

同社は大正11年に日米水産㈱（創業者五十嵐与助氏）として設立され（昭和23年に現社名に変更）、当初は北洋漁業と冷凍魚介類の輸出がメインであったが、漁獲物の保管のため冷蔵倉庫を芝浦（現本社）で開設したのがその原点。冷蔵倉庫業の草分けとも云える存在である。現在、冷蔵倉庫部門、運輸部門、食品販売部門を柱に三位一体の事業を展開している。

3PL事業、輸配送部門への取組みも早く、平成8年には2層式冷凍庫（F&C）を導入、東扇島LSSと上尾LSSを拠点に大手外食チェーンの物流事業を開始。現在、両センターで関東エリア（約500店舗）へ向けた店舗配送を手掛けている。当初20台弱であった冷凍車はその後増車し、現在は3㌧車を中心に首都圏を110台以上でカバー。運送部門の売上はこの十年で倍増しているという。この点について片岡専務は「配送事業は著実な伸びを見せているものの、ライバルも多く中々安定した収益を上げるのは難しい」と厳しい現状を指摘。原油高騰については「荷主各社にサーチャージ導入をお願いしており、何とか理解を頂いている状況だ」と説明する。



左は食品加工場

今後の展開について氏は「日高は東扇島に比べて人手の確保が易いので、通販等の取扱いもおもしろい。全社的にみると上尾物流センターの増設、港湾地区への新たな展開も視野に入れている」、海外事業について「タイに進出（第一、第二工場）して足掛け18年になるが、運営は順調に推移し堅調な伸びを見せている。特に近年は食文化が向上し、外食もレベルの高い店舗が増えている。将来性は充分あると考えている」と答えた。

同社は低温物流事業の第一線である冷蔵倉庫と運送の現場を重視する社風を大事にして来たが、毎月一回各物流拠点を巡視し、ベテランと若手職員が一体となって、各現場の優れている点、改善すべき点を指摘し合う活動を続けている。先の照明アップも現場からの声。新たな展開と地道な取組みに邁進する五十嵐冷蔵、東日本を代表する老舗冷蔵倉庫会社の今後の展開に期待したい。

※「アベイラス高輝度蓄光式避難誘導板」は、アベイラス社の取次店として記事内に記されている三池工業（株）様に販売頂いたものです。